で出迎えて下さった時から，翌日夕方，夫人の車で駅まで送って頂いた時までの丸２日間，すべて教授と共に，教授のスケジュールに従って過すことになった。予期しなかった日本の都市についてのスピーチをスタッフ，院生等の前でさせられる破目になったことを除けば，この２日間はすべて心温まる思い出で埋められている。

ミルウオーキーで印象に残るひとつは，たまたま行なわれた地理学科教官採用テストに立ち合わされ，アメリカのスタッフ採用の実状を垣間見たことである。アメリカの大学では，教官ポストは公募で埋められる。応募者は先ず書類選考を受け，大学は応募者の中から１人乃至数人を招いてスタッフによる審査を行なう。このテストのことは，前夜の歓迎パーティで若手スタッフの話題の一つになっていたが，それは応募者が「キュートな若い女性」であるためらしかった。さて，２日目の午前11時に教官食堂へ連れて行かれると，すでに主任教授以下７～８人のスタッフが，１人のドレス・アップした，一見リンゼイ・ワーグナーに似た小柄の若い女性を囲んで談笑していたが，これがテストの一部と聞かされて驚いた。食事をしながら，この女性は次々と浴びせられるあらゆるジャンルの質問（というよりは洗練された社交的会話とでもいった方がよい）に，正確さの中にウィットを交えながら即妙の返事をするのである。この１時間半位の昼食会でのインタビューで，スタッフは応募者の人柄，知識，考え方等を知り，一方，応募者の方もその教室の雰囲気や研究環境を判断するのだという。続いて午後１時半から約２時間，地理学科の大教室で，スタッフ，院生の他に学生まで網らした５０人近い聴衆を前に，この若い女性の応募者は自分の専門テーマについて約１時間のスピーチを行ない，その後で聴衆から１時間以上にわたり次々に質問の矢が放たれたのである。若い女性が多くのスタッフ等を前に，臆せず堂々と自分を売り込む態度は，日本では想像もできぬものであった。このように，採用に際して男女が平等に扱われる，ということは，女性にとって歓迎すべきことであろう。しかし，平等に扱われる，ということは，職業人としての能力，努力，義務，責任等についても全く平等に要求される，ということでもある。それは，女性の社会的地位が高い，といわれるアメリカでも，女性にとっては決して楽なことでは無かろう。今年の厳しい就職状況を耳にする時，ウィスコンシン大学地理学科の教室で堂々と自分を売りこんでいた若い女性の自信に溢れた態度を思い出すのである。

日本の国土面積

内藤博夫

必要があってわが国の人口密度を調べていたときのことである。昭和５０年の国勢調査報告第1巻を資料にして計算してみたところ，２９６人／km²という値がえられた。しかし別の文献では確か３００人／km²となっていたことを思い出して不審に思った。いうまでもなく人口密度は人口を面積で割ったものである。わが国の面積は昭和４２年に沖縄の本土復帰があったりして，常に同じではないが，３７万km²というのがわれわれの頭の中に定着していた面積であった。日本の人口についてのデータに誤りがないとすれば，面積が問題になる。そこで昭和５０年のデータを使って何回か検算してみたが，どうしても３００人／km²にはならない。不思議なことがあるものだと思いながら何日かが過ぎ去った。

ある日のこと，別の必要があって昭和50年国勢調査の解説書「我が国の人口」をみていると，9ページの表1－10に日本の人口密度が記されており，昭和50年のそれは300人／km²となっていた。よく注意して読むと，歯舞群島，色丹島，国後島，択捉島及び竹島の面積を除いて算出したと注に書かれてあった。つまり296人／km²という値は，日本の面積にいわゆる北方領土（国後，択捉，歯舞，色丹）と竹島（島根県）を含めて計算した結果だったわけである。その後わかったことであるが，国勢調査報告（第1巻）では，昭和50年以前の国土面積も北方領土と竹島を含んだものに改められていた。わが国の面積は，今後は37万km²ではなく，38万km²（正確には37.7 km²）といわなければならなくなったようである。おそらくこれからしばらくの間は国土面積や人口密度をめぐる混乱がいろいろなところで生じてくるのではないかと思われる。

ではなぜ国土面積の修正が行われなければならなかったのであろうか。この疑問にこたえる説明は国勢調査報告のなかではなされていない。周知のようにわが国とソ連との間には北方領土の領有権をめぐって対立がある。今回の修正の背景にこの問題があることは明らかである。それにしても何らかの説明があってもよかったのではないかと思う。過去にさかのぼって修正しているのであるからなおさらである。

いま一つの問題は，北方領土返還要求そのものに関するものである。サンフランシスコ平和条約でわが国は千島列島に対する領有権を放棄している。国後島と択捉島は千島列島の南部を構成する島々である。サ条約を認めたままで国後・択捉の返還を要求するとすれば，「南千島は千島にあらず」という論理を前提にせざるをえない。このような理由づけが国際的に通用するものかどうか，はなはだ心もとないのである。こうした問題点を含んでいる以上，国土面積の修正は領土問題解決の見通しがついた段階で行っても遅くはないのではないか。その意味で，千島列島の現状を「帰属未定のままソ連が占拠」（谷岡武雄・山口恵一郎監修「コンサイス地名辞典　日本編　」）としているとした規定は当をえたものといえよう。

私の実践料理教室

斎藤　功

近年，厨房に精をだすゴキブリ亭主が増えているときく。私は生来の不精者に加え，「男子厨房に入るべからず」という環境で育った故か，男はだまって「出された料理」を食べていればよいという習慣が身についてしまった。しかし，昨今の食生活の欧風化とインスタント化のなかで，日本の伝統的なたべものが消え失せてゆくのを嘆くのは，一人私ばかりではないであろう。そこで，自己防衛のためにつれづれなるまま実践した私の料理のいくつかを紹介することにした。この実践料理は，酒の端であるので早くて簡単にできるというのが味噌である。しかも，そのネタは居酒屋で，あるときは赤提燈で，またあるときは独断と偏見によって工夫されたものであることをお断りしておく。

暮れには来る新年に慶び多きことを願い，こぶ巻と寿留女を使った松前漬を作る。コンブは厚手の大きいのがよい。コンブに合わせ新巻鮭の頭やエラ下を切りかたく巻く。コンブの出汁とサケの塩が